

心洗われる語学留学生の日本語スピーチコンテスト

出場校を初めて全国に拡大した第15回日本語弁論大会

1月30日に神奈川・横浜市開港記念会館で開催

◆語学留学生8カ国17人が挑戦、留学生仲間・恩師ら400人が出席

今や恒例行事となった日本語の語学留学生による「第15回日本語スピーチコンテスト」がさる1月30日（金）に、関東甲信越日本語学校連絡協議会主催の下、文科省、法務省、外務省、神奈川県、横浜市政策局、朝日新聞横浜総局、読売新聞横浜支局、神奈川新聞社、株式会社テレビ神奈川、入管協会、全国日本語学校連合会、かながわ国際交流財団など関係各機関・団体の後援を得て、横浜市開港記念会館で盛大に開催された。今年はとくに参加校を、東京を含む関東地区だけではなく、北海道から沖縄まで全国規模に広げただけでなく、全国日本語学校連合会（J a L S A）の協力の他、多くの大学、専門学校の協賛も得て開催された。一次の書類選考を経ての最終出場者は8カ国17人となり、先生方や留学生仲間ら約400人が開港記念会館に駆けつけ、会場は留学生の声援で熱気に包まれた。また、スピーチ終了後には、横浜市消防音楽隊の見事な演奏が披露され、盛大な拍手が送られた。

今年の出場者は、宮城、埼玉、茨城、千葉、東京、神奈川、長野、和歌山、佐賀の9県の日本語学校・専門学校からやってきた留学生たち。出身国は中国・モンゴル・インドネシア・ベトナム・ネパール・フィリピン・トルコ・タイと多彩だった。

出場者は日ごろの日本語研修の成果を競ったが、桜美林大学リベラル・アーツ学群日本語教育専攻プログラム准教授の安藤節子先生を審査委員長とする厳選な審査の結果、以下の10人の留学生が栄えある賞を射止めた。

【外務大臣賞】千葉・双葉外語学校のフィリピン留学生、モーゼス・ズビヤガさん。【文部科学大臣賞】埼玉・東京日語学院の中国留学生、瞿霜（グ・ショウ）さん。【法務大臣賞】茨城・水戸国際日本語学校のベトナム留学生、グエン・クアン・ヴィンさん。【神奈川県知事賞】神奈川・岩谷学園テクノビジネス横浜保育専門学校日本語科のモンゴル留学生、デネバルダン・ボロルチメグさん。【横浜市長賞】神奈川・飛鳥学院のベトナム留学生、ホアン・ズイ・カンさん。【入

管協会賞】佐賀・弘堂国際学園のネパール留学生、カフレ・サリナさん。【全国日本語学校理事長賞】宮城・仙台ランゲージスクール日本語科のトルコ留学生、セリン・オズデミルさん。千葉・市川日本語学院のベトナム留学生、ウェン・ハー・ウェト・ミンさん。【神奈川新聞社賞】神奈川・翰林日本語学院のタイ留学生、カンパット・プラウインさん。【テレビ神奈川賞】和歌山・和歌山外国語専門学校の中国留学生、張永鳳（チョウ・エイホウ）さん。

スピーチ内容は、日本語学校の学習やアルバイトを通して得た体験を基に、友好関係の促進に何が必要か、お互いを知ることの大切さ、理解し合うことの重要性、あるいは、独自の日本観などふだん気づかなかった貴重な視点が数々披露された。国家の枠と民族の違いを越え、人の心に直に響く内容のある素晴らしいスピーチが多く、聞く人の心を揺さぶった。受賞者を含めた計17人全員の弁論要旨をご紹介します。

◆遊牧民の力と誇りを私はみんなに伝えたい——モンゴル ツォグトサイハン・ウルジーマーさん

トップは神奈川県「横浜デザイン学院」のモンゴル留学生、ツォグトサイハン・ウルジーマーさん。演題は『本気で行けば牛車はウサギをおいぬく』。ウルジーマーさんの関心は、近代化の一方で、薄れゆく遊牧民本来の自然に溶け込んだ生活の良さを現代にどう反映させるかだ。モンゴルでは遊牧民が町に移住し、暖房用と車の排気ガスで、大気汚染が深刻化しているからだ。

ウルジーマーさんは「全員が、遊牧民のような不便でも環境にいい生活をすれば、環境はよくなるでしょう。しかし、この発展していく社会の中で、それは難しいことだと思います。ですから、遊牧民の生活から大事なことを少しだけ現在の生活に取り入れてみてはどうでしょうか。自分の手で生活を賄っていた遊牧民の力と誇り。私はこれをみんなに伝えたいです」と語る。そして「モンゴルに『本気で行けば牛車はウサギをおいぬく』ということわざがあります。……ゆっくりでもコツコツやれば、ウサギに勝てる、という意味です。……日本のような発展した国々から経験を教わって、ゆっくりでも環境にも人々にも迷惑をかけない、いい発展をしたいです。……私の考えではモンゴルと日本はいとこのような国です。日本はモンゴルに今までの発展のいろいろな経験を兄弟の気持ちで教えて欲しいです。最後の木が死んで、最後の川が枯れ、最後の魚が捕まったとき人間は自然の大切さと、お金を食べたり飲んだりできないということがわかるでしょう。こんな時代は来ないように……」と締めくくった。

◆民族の文化を守り、家庭を持ち、安定した生活の大切さ——中国 全永敏さん

2番目は、千葉県「明生情報ビジネス専門学校」の中国留学生、全永敏（ゼン・ヨンミン）さん。演題は『中国の朝鮮族について』。全さんは、中国吉林省の延辺朝鮮族自治州の出身だが、現在、全人口のうち漢族が過半数の59%を占め、朝鮮族は39%に低下。中国朝鮮族の総数も2000年の192万人から2010年の183万人と、中国56民族の中で唯一朝鮮族だけが人口を減らした厳しい現状を報告した。その原因は、親が子どものためにと故郷を離れて韓国に出稼ぎに行ったことにある。「でも子供たちは幸せでしょうか？」と全さんは訴える。

「本物の幸せは親子がいっしょに暮らすことです。お母さんが作った御飯を食べたり、お父さんといっしょに運動したり、勉強したりすることです」。親が韓国に出稼ぎに行った結果だが、皆がいい生活をしているわけではなく、家庭崩壊、離婚、子供の反逆など大きな問題が起きた。韓国では朝鮮族が犯罪を犯し、白い目で見られるようになり、韓国人と中国の朝鮮族は基本的な信頼感や敬意を持ってない場合が多く、距離が遠くなっているという。全さんは「私たちはいつまでも韓国の経済に頼り続けることはできないと思います。僕の世代から変えなければ次の世代まで問題は続きます。中国の朝鮮族として、私は自分の文化を守り、普通の家庭を持ち、安定した生活を送っていきたいと思います。短い時間で変えるのは難しいけれど、私はそうなるための努力を続けます」と地についた生活の大切さを説いた。

◆諦めず努力すれば、夢は叶う——インドネシア ドウイ・レトノ・ワーユンティヤスさん

3番目は東京都「TOPA21 世紀語学校」のインドネシア留学生、ドウイ・レトノ・ワーユンティヤスさん。演題は『失敗しても諦めない』。ワーユンティヤスさんは、日本に留学して日本で就職する事が夢だ。その夢を果たすために、高校1年生で留学奨学金試験を受け落ちた。2年生の時も失敗。大学に進み、就職先でもう1度、奨学金試験を受けたが、それも失敗した。

「毎日悔しくて、悲しくて、悩みました。『もう日本へ行くのは無理ですか？ダメですか？』と私は考えました。でも、日本へ行きたい、留学したい、日本で就職したいという気持ちはさらに強くなりました」。そして3年前に決めた。「奨学金がダメなら、少しずつお金を貯めて、日本へ行こう！」。貯金を貯め1年前に高校時代の夢をかなえ、今日この演壇に立った。驚くべきねばり強さだ。

彼女はリンカーンの事を深く敬慕している。彼女を支えてきたものはスピーチの冒頭に発したリンカーンのこの言葉だった。「しっかり心に決めれば、それだけで目的は半分達成されたも同然である。きっと成功してみせる、と決心することが、何よりも重要だ」。彼女は最後にもう1度リンカーンの言葉を引用した。

「落胆の感情にとらわれないようにしなさい。そうすれば、最後にきっと成功するだろう」。ワーユンティヤスさんは「諦めないで思い続けて努力すれば、きっと夢はかなえられると思います。皆さん、私たちの夢のため、成功するため、がんばりましょう」と400名の聴衆に堂々と呼びかけて拍手を浴びた。

◆若い頃から目的を持って生きることは大切なこと——ベトナム ゲン・ゴック・トゥアンさん

4番目は、東京都「東京リバーサイド学園」のベトナム留学生、ゲン・ゴック・トゥアンさんは、アジアのサッカー強国日本に興味を惹かれて留学した。演題は『目的を持って生きる』。トゥアンさんは「人生の中で若いころから目的を持って生きることは大切なことです。どうしてかということ本当の将来は、若いころから努力した結果」だと語る。そう考えたのは、ベトナムで中年のおじさんの姿を見てのことだ。おじさんの生活は苦しい。若い時は「自分のことは何も考えたくなくて好きなことだけをして」きたが、結婚しても良い仕事が見つからず、若い時に努力しておけばよかったと後悔している姿を見たからだ。

「ぼくたちはまだ若いのでどんなに大変か、どんなに残念か、たぶん分からないと思います。ですからまだ心配していません。しかし分かった時にはもうおそくなってしまいます。……しかしいい将来になりたかったら好きなことだけをしてはいられません」と自戒する。優勝するために嫌な練習もするオリンピック選手。トゥアンさんのために努力しているご両親。アルバイト生活の厳しさ。「その大変な中で忘れてはいけないのは自分の目的です。何のために今、私は頑張っているのか、どんな将来にしたいのか、よく考えて自分の目的をしっかりと持ちましょう。それからどんな大変なことがあっても、どんな悲しいことがあっても目的を果たすためにすぐ努力しましょう。そうすれば将来は残念な気持ちがないはずです。みなさん！目的をしっかりと持っていきましょう」と意気軒昂だ。

◆自分を箱に閉じ込めず心を開いて交流しよう——モンゴル デネバルダン・ボロルチメグさん

5番目は神奈川県「岩谷学園テクノビジネス横浜保育専門学校日本語科」のモンゴル留学生、デネバルダン・ボロルチメグさん。演題は『箱』。ボロルチメグさんは、「箱」を作って自分の殻に閉じこもらないで、世界と交流する大切さ、異なった見方をする人が多数いる大切さを就職で知った体験談を語った。それまでの彼女は、14年間、モンゴルの田舎で過ごし、電気もガスも水道も無い生活をもものともせず、平気で過ごしていた。しかし、子供から大人へと成長する中学生時代に、親戚の家の事情で都会に移り、周囲の人と交流を避けるようになった。そうした生活が高校、大学と10年も続き、人の意見も聞かずに交流を避け

てきた。しかし、就職がきっかけで彼女の生活が変わった。

「年齢が違う様々な人々と出会って、付き合ってみると、物事について、私が今まで思っていたのとまったく違う意見に出会いました。……その時、『どうして、私はそういうふうに思わなかったんだろう』とあって、自分の心に耳を傾けるようになりました。そして、私は、ずっと自分が箱の中に入っていたことに気がつきました。箱に入って、ふたをしっかりと閉めて、外の声の聞こえがなかったのです」。彼女は堂々と「私達は留学生ですから、今いろいろな国の人々が周りにいます。ですから、今まで自分がずっと思っていた考え方と違う意見を聞くチャンスがあります。外に出て、たくさん人と交流して、たくさん勉強しましょう。自分を小さな箱に入れなくてください」と、留学生に呼びかけた。

◆一人一人の成長が、よりよい社会につながっていく——中国 徐倩さん

6番目は埼玉県「武蔵浦和日本語学院」の中国留学生、徐倩（ジョ・セイ）さん。演題は『私たち若者は何ができるのか』。徐さんは、中国の寧波工程学院4年生、単位交換生として同学院で学ぶ、書道と読書好きの女子学生だ。徐さんは「社会のルールを守って正直に生きた人々は普通の生活を送り、ルールを守らず自分の利益を求めた人たちが、最後に地位と名誉を得ることがあります。このような状況をおかしいと言え、周りに『あなたはまだ若いから、世の中のことをよく知らないだけだよ』と言われるかもしれません」と語る。

「私たちには何ができるのでしょうか」「若者たちは、毎日生活だけのために働き、夢を抱くこともできません」と徐さん。だが、もう1人の徐さんは、一歩踏みこんで考える。「ある1つのことは、皆さんと私にも出来るのではないかと考えました。私たち若者世代一人一人が夢を持ち、一人一人が成長することです。そうすれば、社会はもっとよくなるのではないのでしょうか」。徐さんは個人個人の可能性にかける。「私たち若者は、何かを大きく変えることはできないかもしれませんが、しかし、一人一人が成長していくことが自分だけではなく、よりよい社会につながっていくと思います。自分のいる環境を『悪い』と決め付けて、自分の夢をあきらめないで欲しいです。私も夢の実現に向けて今頑張っています」と語る。その徐さんの小さな夢は「日本のすばらしさを中国の人々に伝える仕事をしたい」と。頑張ってください。みな応援していますよ。

◆歌手になり日本とベトナムの架け橋になる——ベトナム グエン・クアン・ヴァインさん

7番目の茨城県「水戸国際日本語学校」のベトナム留学生、グエン・クアン・ヴァインさんは法務大臣賞に輝いた。演題は『わたしの夢』。グエンさんは、日本のアニメを見て魅かれ、日本の文化や習慣を勉強し日本が好きになった。14才で

日本行きを希望したが止められて両親を説得、4年後に留学を果たした。

だが、ヴィンさんはベトナムの歌を歌えない。「ベトナムの歌の歌詞はメッセージ性が無く、何が言いたいのか分らないし、……ベトナムの歌手は他の国の歌のメロディーをコピーする人もいます」。このため、ベトナム音楽は心に残らず、覚えられないという。同じく「ベトナムの先生は作文の長さだけを見て、内容を見ません。作文が長ければいい点数をもらえます……でも、学生が良い点数を取ると、先生は学長にほめられます。ですから、先生はテストのときに授業中に書いた作文をコピーさせます。まじめな学生はいい点数を取ることができません。学生はいつもコピーばかりしているので、学校を卒業したら、勉強をしたことをほとんど忘れてしまいます。これでは学校へ行く意味がありません」と嘆く。

しかし、日本では楽しく勉強ができ、学校のテストも良かった。「これからも毎日一生懸命日本語を勉強して、日本語の発音がもっと上手になって、いつか必ず日本の歌手になります。日本語の歌を歌うことで、日本とベトナムをつなぐ架け橋になり、ベトナムの人たちに大好きな日本の良さを伝えていきたいです。そのときは、どうかわたしを応援してください」と弁論を締めくくった。

◆世界で一番静かな人がいる国は日本——ネパール スナル・アムリトさん

8番目は、神奈川県「横浜国際教育学院」のネパール留学生、スナル・アムリトさん。演題は『日本の生活』。アムリトさんは勉強と旅行のために来日し、1年経ったが、元気に通学中だ。国によって文化や言葉、生活習慣の違いがあり、アムリトさんにとっては、大変なこと、びっくりした事が多かったようだ。

漢字は難しくて覚えにくいのが、例えば「逃げる」という字。アムリトさんは「人が逃げているように見えるでしょう。漢字が苦手なみなさんも、こうやって覚えれば、楽しく覚えられますよ」と薦める。また、アムリトさんは日本の駅が好きだ。「駅には人がたくさんいます。いろいろな人がいますが、みんなとても静かにしています。私はうるさいところがきらいなので、日本の駅のような静かなところにいると、気分がよくなります。だから、朝の駅はとても楽しいです。世界で一番静かな人がいる国は、日本だと思います」と意外なことを言う。

日本人には気がつかない視点は、ワールドサッカーでも見られた。ネパール人は、仕事を休んでもサッカーを見るが、アムリトさんは、日本人が少しみただけで、すぐ行ってしまったことに驚いている。だが、アムリトさんは「でも、私は日本の忙しい生活は、楽しくておもしろいので、好きです。本当に日本へきて、よかったと思っています。……わからないことがあったら、すぐ先生に聞いた方がいいですよ。日本人の先生はやさしいし、親切なので、先生に聞くのが一番わかりやすいと思います」と助言するのだった。

◆小説の中には魔法の世界があり、読んだ人々を癒してくれる——中国 瞿霜さん

9番目の埼玉県「東京日本語学院」の中国留学生、瞿霜（グ・ショウ）さんは文部科学大臣賞を受賞した。演題は『小説が私に教えたこと』。瞿さんは、中学生時代、大変ないじめにあった。本を滅茶苦茶にされたり、ゴミを机の中に入れられ、人との付き合いが怖くなり、大勢の中では逃げたくなった。「私の一生はこのままで残酷な終わりを迎えるのだろう」と絶望したこともあったが、瞿さんは、大学で日本語を専攻した時に、日本人の先生との出会いで救われた。

先生は「世の中の全ての人間にはその人なりの幸せが必ずある。すべきことは待つことではなく探すことだ。日本語を勉強した以上、小説でも読んでみなさい」と言われ、日本の小説を読んだ。最初は辞書を引きながらだったが、「不思議なことに、それまでイライラした気持ちがだんだん落ち着くようになってきたのです。いじめのことも、何もかも、忘れられます。それに先生の言った通り、小説の中には魔法の世界があります。本を読んだ人々を癒していきます」

「太宰治はこう言いました。『幸福感というものは、悲哀の川の底に沈んで、幽かに光っている、砂金のようなものではなかろうか』。日本の小説と出会えてよかった。……今まで経験してきたことは苦しくても、その中には幸せが必ず潜んでいます。今、こういう風に考えられるのは小説が教えてくれたからです」

日中関係改善策も印象深い。「人間と人間の交流の中には、歴史問題を取り入れてはいけない。文化、文学に基づいた交流が人々に感動を与えるはずです」

◆全ては理解から生まれ、理解し合うことは愛だ——フィリピン モーゼス・ズビヤガさん

10番目、千葉の「双葉外語学校」のフィリピン留学生、モーゼス・ズビヤガさんは外務大臣賞を勝ち取った。演題は『「理解」から「架け橋」を』。モーゼスさんは「成功までやり続ける」が信念。将来は国際舞台で働き、日本で学んだ事を活かし、母国の恵まれない子や障害者の力になりたいという。

大切にしている言葉は「理解」。「私は日本語学校に通い、違う国の人々との触れ合いの中、皆がそれぞれの国の代表だと考え、私は皆のいいところを見るように努めました。学校に行くのは、単に日本語を学ぶことではなく、日々、他国の文化や国際的な意識も吸収することができます。まるで、小さな国連のような存在だと思います。また、相手を理解し、お互いに協力し合うこともできます」

モーゼスさんは、地方の日本人は外国人に冷たいと聞いていたが、実際は、雨が降ってお婆さんは傘をくれた。財布を持たずにバスに乗り、怒られると思いきや優しくした運転手さん。郊外ボランティアでフィリピン文化を子供達に語る出会いも。「一つ一つのエピソードは簡単なものかもしれませんが、このような

経験を通して、自分だけが発見した感動で、国と国との間に橋を架けられたと思っています。……全ては理解から生まれると思います。相手の立場に立って、お互いの考えや文化を知って、理解し合うことは、『愛し合う』そのものだと、私は強く信じています。そして、その瞬間に、理解のネットワーク、架け橋のネットワークがどんどん広がっていくのだと思います」と、モーゼスさんは力強く説く。

◆1枚の仏像写真が日本美術研究に向わせた——トルコ セリン・オズデミルさん

11番目の宮城県の「仙台ランゲージスクール日本語科」のトルコ留学生、セリン・オズデミルさんは全国日本語学校連合会理事長賞を獲得した。演題は『私の夢と、私が日本に来たストーリー』。オズデミルさんは、親日国トルコの中でも大の親日家で、日本の仏像、版画など日本美術研究のために来日した。苦心の末に日本語能力試験2級に合格し、1級も受験するなど努力の末に、東北大学大学院研究生への道を開くまでにいたった経緯を語った。

オズデミルさんは「私は、トルコ人みたいに、日本人もトルコの事を好きだと期待を抱いていました。しかし、日本人は、トルコ人みたいに、両国の関係に特別な興味を持っていません。それが、片思いみたいな感じがして、少しさびしいと思います」と前置きして語った。トルコ国立マルマラ大学を卒業し、契約教員として勤めたある日、「私は、日本の仏像の写真を見て、強い印象を受けました。日本の美術の美しさに気づいた私は、日本の美術を学びたいと思いました。この教員時代、日本の美術に関して目が開かれ、私の夢は、日本の美術の研究になりました」と日本美術研究を志したきっかけを明かす。

その上でオズデミルさんは「美術の架け橋から始めますが、お互いの国をよく知れば、交流も盛んになり、親近感が湧くと思います。もっと多くの人達が、愛情を持ってお互いの国を語る日が来ることを、夢に見ています」と、彼女もまた、お互いを知ることの大切さを強調した。今後の活躍に期待したい。

◆イメージに縛られず、まず目の前の人と付き合おう——タイ カンパット・プラウインさん

12番目の神奈川県「翰林日本語学院」のタイ留学生、カンパット・プラウインさんは神奈川新聞社賞を受賞。演題は『ごめんね！ 韓さん 先入観が起こした私の失敗』。日本語が話せる弁護士が夢のカンパットさんは「韓国人がタイ人を見下している」という噂に影響され韓国人が嫌いだったが、日本で助けてくれたのは韓国人。困っている時に話しかけてくれ、試験に合格できるように本を貸してくれ、弁論大会に出る自信のない自分に勇気を与えてくれた。

「このことで私が教わったのは、イメージとはどれだけばかばかしいものかということです。本人と一度も話したこともないのに、ニュースやインターネット、または、過去の出来事に影響され、イメージを作って、その国の人の性格をあれこれと決め付けて信じてしまう人も少なくないでしょう」。イメージに縛られるな。「もし、彼らの実態を知りたいのなら、まずは歴史、政治、宗教などはさておき、目の前の人と、直接付き合ってみたらどうでしょうか。ひょっとしたら、あなたの友人や結婚の相手は、予想外の国の人になるかもしれません。……皆さん、まずは先入観を捨てて、目の前の人達と話をし、自分の目や耳で判断することからはじめてみませんか。私はタイ人の代表として、これからもっと深くアジアの国々に友好関係が生まれるように心から祈っております」とスピーチ。日中韓3国の深い友好関係の構築がアジアの国々をどれだけ平等に豊かにするか、と力説するカンパットさんに惜しみない拍手が送られた。

◆この国が好きだが、物価が高すぎる日本——ネパール スヌワル・ディペンドラさん

13番目の埼玉県「与野学院日本語学校」のネパール留学生、スヌワル・ディペンドラさん。テーマは『高い日本』。ディペンドラさんは、外国生活へのあこがれと進学、日本の文化やアニメに興味があって来日したが、驚いたのは物価の高さだった。ネパールではリンゴが100円で1キロ買えたのに、日本では一番安くても1個で100円ぐらい。交通費もバス代が10倍以上と高い。

バイト先で一緒に働いている日本人が、留学理由を聞いてきたので「日本の大学に進学するつもり」と答えたら、彼は「え～！ 日本の大学は高いよ」と。このことを聞いて「日本人も高さが深刻な問題だ」と分かったが、「ネパールではこんなことは絶対にありません。大学の勉強内容やレベルの話は必ずします」。彼に東京住まいを話すと「高くないの？」と、やはり「高い」と言った。「やはり日本は高い国です。……私はこの国が好きです。でも十分なお金がないと、生活するのは難しいです。家賃4万円、家計費用2万円、交通費1万円、電話代1万円、食費1万円、教育費用を除いてほしい9万円が、今の私の毎月の経費予算です。ネパールでは普通のサラリーマンの1か月の給料は2、3万円です。それから考えると留学している私にとってこの予算は高すぎます。……これからさらに2%上がるらしいです。……さすがの高い日本……」

高い物価への驚きと嘆きと皮肉がミックスしたスパイスの効いたスピーチだった。お金の換算してしか考えられなくなっている日本人も浮き彫りにされた？

◆人づくり大切にす日本の小学校教育——ベトナム ウェン・ハー・ウェト・

ミンさん

14番目の千葉県「市川日本語学院」のベトナム留学生、ウェン・ハー・ウェト・ミンさんは、全国日本語学校連合会理事長賞を射止めた。演題は『逃げるな、隠すな、ごまかすな』。小学校時代、日本で暮らしたミンさんは3年の時、絵の具忘れを先生に叱られるのが怖くて「持ってきましたが見つかりません」と嘘をついた。学友が必死に探してくれたが絵具は出ない。翌朝絵具をクラスのどこかに隠そうとしていた所を先生に見つかり一喝された。「9歳の私の心に響きました。『ミンさん、叱られるのを恐れないで、正直で素直になりましょう』」

現在、世界中で日本式教育がブームで、ベトナムでも『日本流の子供の育て方』などの本が溢れているという。日本で体験した小学校生活は、勉強とスポーツ、運動のバランスが良かったという。ミンさんは「先生も一人一人の学生の性格、長所、短所を知り尽くし、正しい生き方をみんなに教えます。主に日本の小学教育は『人づくり』を大切にしています」。逆にベトナムは授業漬け。週末は先生の家への塾通い。体育は体操だけ。先生は成績不良だと怒るので怖くて嘘をつき、宿題をやらなかったら隠す。先生と教え子の間に壁があるという。

ミンさんの夢は母国での小学生専門日本語センターの経営だ。「『教育は人作りから』、この言葉は私が21年間生きて、学んで分かった事です。……『逃げるな、隠すな、ごまかすな』、先生からのおまじないを、今度は私が子供たちに捧げる番です」。ミンさんの目は輝いていた。

◆子供と大人の違いは時間の長さだけ、他は何も変わらない——中国 張永鳳さん

15番目の和歌山「和歌山外国語専門学校」の中国留学生、張永鳳さんは株式会社テレビ神奈川賞を獲得した。演題は『教えることは学ぶこと』。山東省出身の張さんの夢は日本語教師になること。幼い頃、父がいなくなった板で作ってくれた黒板で数字を書いたり、絵を描いたりするのが好きだった張さんは、母親から「一番いい勉強方法は他の人に教えること」とよく言われて育った。

大学2年の冬休みに、幼稚園でボランティアをしたが、初日から事件で名前を間違え、女の子が「先生、悪い！」と泣き出した。園長先生の知恵で子供たちに可愛い名札を作り問題は解決したが、話を聞かずに消しゴムを投げる子などいたずらはつきず手を焼いていたが、1人の女の子が張さんの似顔絵を描いてくれた。嬉しくてその子を抱きしめると、別の子供たちも似顔絵を描いてくれた。

「ただただ彼らの優しさに感動しました。私は嬉しくて、泣きそうになって『よく似てるね。可愛く描いてくれたね』とほめてあげました。彼らは大切なことを教えてくれました」。名前が大切な事。大人も子供も自分の才能をほめてもらいたいという気持ちがあること。「人は誰でも尊敬する人や好きな人にずっと

自分のことを見ていてほしいという気持ちがあるということです。あなたが笑顔で相手を認めることは人間関係をうまくする宝物です。最後にもう一つ、子供と大人の違いは、生きている時間の長さが長いか短いかということだけで、他には何も変わりはないことがわかったのです」。張さんは既に立派な先生だ。

◆人の絆、互いの支えや優しさこそが大切——ベトナム ホアン・ズイ・カンさん

16番目の神奈川県「飛鳥学院」のベトナム留学生、ホアン・ズイ・カンさんは横浜市長賞に輝いた。演題は『日本の大震災からベトナムの学ぶこと』。今年7月にベトナム中部を襲ったラマスーン台風で、家、車バイクが流され10人以上の死者が出た。親戚も仕事を失った。カンさんは「そこにいたい、何かしてあげたい」という気持ちになったが何もできなかった。それより心を痛めたのは、ベトナム政府の災害対応策の無策ぶりと若者の無関心さだった。

政府は「予算不足、人出不足」と言い訳し、「私は何もできないから、注目しなくてもいい」と考える若者が大勢いたことだ。カンさんは、東日本大震災の対応に注目した。自衛隊は危険を顧みずに何週間も行方不明者を探し続け、ボランティアも自衛隊を手伝い、寸断された道路や瓦礫は、政府の素早い対応で1週間もかからず仮復旧した。「日本の大震災から、ベトナムが学ぶべきことが多くあります」とカンさん。実はカンさん自身、ベトナムの奥地で、乾期や疫病で困った奥地の農村で、田圃を耕し、家畜に餌をやり、支援物資を渡したのだ。

「苦しみの中で、人と人の絆、そしてお互いの支えや優しさは、人間にとってどんなに大切で必要か、ようやく理解できました」とカンさん。今、ベトナムは世界から注目されているが「今こそ我々が覚醒し、真剣に考えなくてはならない重要な時です。……さあ、皆さん、その未来を見つめ、一緒に力を合わせませんか」と述べ、カンさんは力強くスピーチを締めくくった。

◆家族一緒にの幸せな思い出が私を支えている——ネパール カフレ・サリナさん

17番目の佐賀県「弘堂国際学園」のネパール人留学生、カフレ・サリナさんは、入管協会賞を受賞した。演題は『日本と我が国ネパールの女性問題』。サリナさんは、男性社会のネパールと日本とを比較しながら女性問題についてスピーチした。男性上位のネパール人のサリナさんが驚いたのは、日本の女性が酒を飲み、たばこを吸い、男性と同じように仕事をしていることだった。

ネパールの田舎には、世界的に問題になった「カムラリ制度」があるという。「カムラリ」は奴隷になる女の子のことだ。貧しさ故の制度だ。日本のテレビドラマの「おしんと同じです」とサリナさん。2000年に禁止されたが、一部に

まだ残っている。しかし、サリナさんはネパール女性の良い所も見つけた。

ネパールでは家族をととても大切にしいつも一緒だ。「いっしょに住んで、いっしょにご飯を食べ、毎日いろいろな話をします。その時間がとても幸せです。子供はいつもお母さんといっしょにいます」。日本は保育園に行く子供が多い。「私は、日本の子供も家族ともっといっしょにいる時間があつたほうが良いと思います。家族といっしょに過ごした幸せな思い出がたくさんあります。その思い出が、今の私を支えています」と助言する。日本留学を果たせたサリナさんは、両親に深く感謝している。「私は日本で頑張つて、ネパールの人に、女性でもいい仕事ができることを見せたいです。……私は、世界を変えるのは女性の力だと思います。日本もネパールも、女性の力で国はもっとよくなります。それを証明することが、私の目標です」と力強く宣言した。